

## 週報

## こひつじ

第39巻 5号  
 大津キリスト教会  
 菊池郡大津町室 119  
 TEL 096-293-4470  
 FAX 096-293-4961  
 牧師 米村 英二

## こ覧になる神

そこで、彼女は自分に語りかけられた主の名を「あなたはエル・ロイ」(こ覧になる神)と呼んだ。それは、「こ覧になる方のうしろを私が見て、なおもここにいるとは。」と彼女が言ったからである。

(創世記一六の一三)

## その一 女奴隷ハガル

毎年、元旦礼拝では、その年のす。

ローズンゲンの聖句を、神が自分に 彼女は不幸な女性でした。幼いに個人的に語られた約束の言葉と頃、エジプトからカナンの地に連れて私たちは受け取り、その言葉 れてこられた奴隷で、アブラハムによって、新しい一年を歩む決意の妻サラに仕えていたのです。

をしてみました。 彼女は、けれども、女主人のサ さて、今年は、どんな言葉でし ラには大事にされていたように思 ようか。読んでみましょう。 われます。

「そこで、彼女は自分に語りかけ と言いますのは、サラは自分が られた主の名を『あなたはエル・ 年を取り、もう子どもを期待でき ロイ』(こ覧になる神)と呼んだ」 ないとわかると、自分のために子 (創世記 一六の一三) を産んでくれる女性としてハガル

この言葉を発したのは、旧約聖 書に登場するハガルという女性で つまりサラは思いました。

私の女奴隷ハガルを夫アブラハムに与え、彼女によって生まれた子を、自分たちの養子にしよう。それはサラには苦痛の伴うものでしたが、それによって、アブラハムが後継ぎを得るなら、それでもよいと考えたのです。

また安易に、こうも思ったでしょう。

「女奴隷ハガルは、気の毒な境遇の中から自分が拾い上げ、めんどろをみてきた女である。彼女は、すんなりと私をその子の母にしてくれるに違いない」

子どものいない妻が女奴隷によって子を得て、その子を養子とすることは、当時、よく行なわれていたことでした。

ところがサラの計算に狂いが生じます。

ハガルは、子を身ごもると、その子への愛を募らせていったのです。

当然のことながら、ハガルは思いました。これは私の子だ。たとえ私の女主人とは言え、私がおなかを傷めた子を他人に渡すことなどどうしてできよう。

ハガルは、身勝手な女主人サラによって未婚の母とされ、その子まで奪われようとしているのです。ハガルは抵抗しました。

そんなハガルの態度に怒りを覚えたサラは、ハガルに辛く当たります。

耐えられなくなってハガルは、サラのもとから逃げるのです。

ところが荒野の泉のほとりまで来ると、主の使いが彼女に現われ、こう言いました。

「ハガルよ。すぐあなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい」

しかしまた主の使いは、彼女を慰め、励ましました。

「あなたの子孫は、数えきれないほど増え、栄えるだろう。また、あなたが産む男の子にはイシュマエルという名をつけなさい。主があなたの苦しみを聞き入れられたから」

そこで、彼女は自分に語りかけられた主の名を「あなたはエル・ロイ」(こ覧になる神)と呼んだのです。(続)

\*\*\*\*\*  
す。

## 今日の礼拝

\*\*\*\*\*

○第一礼拝は午前10時から、  
第二礼拝は午前11時から。

○教会学校は午前10時から。

○説教は米村牧師。

\*\*\*\*\*

## 北海道旅行

\*\*\*\*\*

九日間の旅を終えて、雪の国、  
北海道からぶじ帰って来ました。

北海道では、いつも、聖書学院

の奉仕の合間に雪道の散歩をする  
のが楽しみだったのですが、今回  
は、外の気温が零下一四、五度ま  
でさがるほどの寒さで、しかも風  
が強く、雪の舞う日が多かったた  
め、さすがに早朝の散歩はむりで  
した。

一度だけ穏やかな日があつて、  
幸子さんといっしょに近くの生協  
のマーケットまで出かけましたが、  
歩道の雪が深く、一歩踏むごとに  
足が沈み、なかなか先に進めませ  
ん。通常の二倍の時間をかけてよ  
うやく戻ってきました。

冬の北海道は、やはり別世界で

す。聖書学院での奉仕は三年ぶりで

す。昨年は、オンラインで授業を

しましたので、ぼくの顔を覚えて

いる学生も多く、「お会いするのを

楽しみにしていました」と歓迎し

てくれました。

今までになく、学生からの質問

がたくさんあつて、そのため一方

通行の授業ではなく、学生たちの

心にもふれることができたのが、

ぼくには何よりうれしく思われま

した。

一月二九日の礼拝は、菅原牧師

の教会でお話しさせていただきま

した。

集会は、マスクをしながらです

が、賛美の時間が長く、コロナ禍

とはいえ、かなり自由な礼拝でし

た。説教も、十分な時間が与えら

れているようでしたが、最近のぼ

くの原稿は三〇分ほどにまとめら

れていますので、少し幸子さんに

助けてもらうことにしました。

彼女の話は、挨拶というより、

自分の生い立ちからキリストに出

会い、献身するまでの証ともいう

彼女が、そんな話をみんなの前で  
やったのは初めてだったのではな  
いででしょうか。  
学院長の鍛冶川さんも、心にふ  
れるところがあつたのでしよう。  
「ぜひ、これを学院でも話しても  
らいたかった」  
と言ってくださり、彼女もほっ  
としたようです。  
そんなわけで、今回の旅行のハ  
イライトは、幸子さんの証だった  
と言つてよいかもしれませぬ。  
帰りは三一日(月)の午前の便  
でしたので、天候の不安もあり、  
空港の近くに泊まったほうが安全  
だろうと思い、全日空のホテルを  
予約しました。

美しく見えました。

ちようど前の晩に「山と原野と

スケッチと」坂本直行さんをめぐ

る旅」というNHKの番組を見

て、彼の描く「日高山脈」に深い

印象を受けたばかりでしたので、

ホテルの窓から見える光景がいつ

そうすばらしく思えたのでしよう。

帰ったら、ぜひ、その画集を探し

てみようと思いました。

翌日は快晴で飛行機はぶじ福岡

へと向かつてくれました。